



Title	<Book Review > 堀田凱樹・酒井邦嘉著『遺伝子・脳・言語-サイエンス・カフェの愉しみ』中央公論新社、2007年
Author(s)	中村, 征樹
Citation	蛋白質 核酸 酵素. 2007, 52(11), p. 1395
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3007
rights	共立出版の許諾を得て掲載
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

遺伝子・脳・言語 サイエンス・カフェの楽しみ

堀田凱樹・酒井邦嘉 著
新書判/256ページ
819円(税込)
中央公論新社
ISBN 978-4-12-101887-8



コーヒーやビールを片手に、研究者と市民が対等な目線で語り合う——10年ほど前にイギリスやフランスではじまったサイエンス・カフェという試みが、ここ数年、わが国でも急速に広がりつつある。本書は、武田計測先端知財団の主催で、遺伝子と脳をテーマに行なわれたサイエンス・カフェでくり広げられた、きわめて刺激的な対話の記録である。

東京・目黒の庭園美術館の一角にあるカフェで、わが国の遺伝学研究を切り開いてきた堀田凱樹氏と、言語の問題に脳研究という手法からアプローチしてきた酒井邦嘉氏をゲストに迎え、6回のシリーズで行なわれたサイエンス・カフェが本書の舞台である。

堀田氏と酒井氏は、遺伝子研究や脳研究から得られた最新の知見を紹介

しながら、脳と言語の問題について、あるいは、手話や双子、コンピュータなど、さまざまなテーマをめぐって、参加者にむかい語りかけていく。幅広い視野と旺盛な知的好奇心、多岐にわたる教養をもつ2人の語りは、それだけでも十分に魅力的である。しかし、本書のなによりもの醍醐味は、教師や、ろう者、音楽家、通訳家、企業技術者、ライターなど、きわめて多彩な参加者からつぎからつぎへと発せられる質問や発言、そして、そのなかで紡ぎあげられていく対話のダイナミズムにこそある。

“分かる”ことをめぐって行なわれた第6回目のサイエンス・カフェでは、禅における“悟り”との類推や、機械トラブルの原因を究明していくプロセスなどのかかわりで、参加者からさ

まざまな意見が発せられていく。素朴な疑問や、仕事や生活のなかで培われた経験に根ざした多様な発言に触発されながら、2人の講師を含むすべての参加者がこれまでの研究で得られている知見を参照しつついっしょになって考えていく。その姿は、感動的ですからある。

対話形式の著作では、しばしば、想定された“答え”にたどり着くための技法として“対話”が活用される。しかし、本書で展開されているのは、そのようなかたちばかりの“対話”とは根本的に異なる、共同的な思考のプロセスとしての本当の意味での対話である。

評者は、サイエンス・カフェの真髄は、即興性のなかで培われる本当の意味での対話にこそあると考えてきた。本書はまさに、サイエンス・カフェのそのような可能性を具体的に提示している。

本書は小著ではあるが、わが国におけるサイエンス・カフェのあり方に、また、研究者と社会との関係に一石を投じる一冊である。ぜひ一読をおすすめしたい。

中村征樹(文部科学省科学技術政策研究所)

新刊紹介

化学フロンティア 18

ゲノム化学

医学、分子生物学への応用と展開

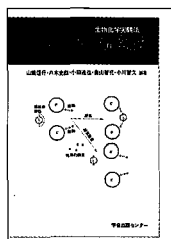


齋藤烈・杉山弘・中谷和彦 編
B5判/224ページ/4,725円(税込)/化学同人
ISBN 978-4-7598-0748-6

いま注目のゲノム化学について、最先端の化学と分子生物学的手法を駆使し研究している第一線の研究者が解説する。

生物化学実験法 52

レクチン研究法



山崎信行・八木史郎・小田達也・島山智充・小川智久 編著
A5判/160ページ/3,255円(税込)/学会出版センター
ISBN 978-4-7622-3054-7

その研究小史から精製法、活性測定法、レクチン・糖質間の特異的相互作用の定量的解析法、機能解析法までを解説。

遺伝子研究と社会

生命倫理の実証的アプローチ



山中浩司・額賀淑郎 編
A5判/282ページ/3,570円(税込)/昭和堂
ISBN 978-4-8122-0711-6

遺伝子研究の倫理的・法的・社会的問題点を、文化・政策・歴史・市民社会の視点から学際的に論じた一冊。